

## 新年のご挨拶

一般社団法人 全日本建設技術協会 会長

おお いし ひさ かず  
大石 久和



あけましておめでとうございます。新年が、会員の皆様にとって、幸多き年になりますよう心より祈念申し上げます。また、ご家族のご清栄をあわせてお祈り申し上げます。

2018年も災害の多い年でした。被災地の全建会員の皆様は、寝食を忘れてご苦労されたことと存じます。われわれ建設系職員のこうした経験は、地域の期待を背負って仕事をしているとの実感ができる喜びもあるのですが、少ない人数でそれに応えなければという苦しみも大きいものがあると思います。

気象の凶暴化は全世界的な規模で生じています。アメリカでも、ヨーロッパでも、洪水、強風、山林火災などが人々の命と財産を収奪しています。わが国の場合は、それに地震の災害が加わります。

世界の面積に占める割合が0.25%しかないわが国で、震度6以上の地震では世界の20%という割合で起きています。予測の難しい地震ですが、日本では活動期に入ったという説を唱える人もいます。

普段の生活や産業を支える交通インフラ整備・管理にも大きな期待がかかっていますし、

いま示した防災インフラ整備や発災後の復旧活動など、われわれ行政側の建設技術者の果たすべき責任の重要性はますます増大しています。

それは全国レベルでも地域レベルでも、災害が頻度を増し外力の強大化が進むとともに、地域の少人数化と高齢化が進んでいるからでもあります。にもかかわらず、特に技術系の公務員の定員削減度合いが大きいことは、大きな問題だと言わなければなりません。

財政再建にしても憲法改正にしても、わが国では観念論や原則論が飛び交うばかりで、具体の事実をふまえた議論が十分ではありません。このような状況では、われわれはあの悲惨だった第二次世界大戦敗戦の1945年をもう一度迎えなければならなくなるでしょう。

作家の司馬遼太郎氏は、「わが国はときにリアリズムを失うことがある」という意味の言葉を残しています。われわれ技術系の職員は、具体の事実や科学的論理、つまりリアリズムをふまえて活動しています。

2019年には、国が直面するすべての問題について、事実と科学的根拠に裏付けされたリアリティのある議論が進み、技術系職員の重要性が再認識されることを願っています。